大平相談役の想い出

吉澤　正治

昭和四十五年十月二十日、柳橋の料亭で大平先生を中心として共同石油の当時の森社長その他の皆様との席にご一緒させていただいたときのこと、話題が人の名前というものは同じ字でもそれぞれに読み方が違うので厄介なものだというようなことになり、先生から、「君の名は何と呼ぶのだ」といわれたので、「私の名前は正治と書いて〝ショウジ〟と読みます」と答えてから、たまたまその席では先生が珍しく大変くだけたお話をしておられたのでつい私も図に乗って、「私の場合は明治に原因があって大正に結果が出てきたので正治と名付けたのでしょう。まことに単純明快なものです」などと蛇足を加えますと、「それじゃ、治正じゃないか」「治正じゃ語呂が悪いからひっくり返しにしたのかも知れません」。こんなやりとりがいま鮮やかに懐しく想い出される。

先生は真面目な方ですが、ある一面剽軽なところもあったようで、あるとき芳明会の世話役をしていた宮崎君と東京クラブで先生のお伴をしたおり、ティーグランドで正座して「僕は育ちがいいのでいつもこうしてきちんと坐るんだよ」などとおっしゃっていたけれど、実はくたびれていたに違いないとわれわれは見ていた。そのときも霞ヶ関ＣＣのお約束があったけれど後輩どもとのプレーの方が気楽だからこちらにきたとおっしゃって回られた。ストレスの強い政界におられると気楽に軽口など叩きながらの時間は貴重なのだろうとお察ししていた。

昭和四十一年におこがましくも先生に弊社の相談役ご就任をお願いしたところ承諾された。われわれの会社は先生に相談役になっていただくほど大きくもなければ、世の中に名のとおったものでもないけれど、一橋出身者

が数人役員で働いていたので後輩の面倒を見てやろうとお考えになってのことだったと思う。人間だけは解っていて相談役は承知したものの、どんな会社かやはり一度見る必要があるという先生の真面目さといおうか物事を好い加減にしない物堅さなのでしょうか、ご承知になってしばらく後、四十一年九月九日の役員会の席にひょっこりこられた。当時会社は文京区の茗荷谷にあった。その後四十二年二月二十二日、七月二十五日の役員会にも出席された。先生がこられると何となく国会の予算委員会のような雰囲気になって、やたらと妙な質問が出た。さぞご迷惑なことだったと思う。近しくお目にかかっていると、政界の大立者の大平先生というより学校の先輩としての気持の方が濃くなって、いろいろと生意気なことを申し上げたことがいまさらながら恥しい気持である。

当時ベトナム戦争が泥沼にはまりこんでいたので、日本中で論議が盛んだった。「ベトナムの問題は基本的には土地問題でしょうから、日本としてはこの点を解決するように働きかけるべきではないでしょうか」などと述べたてたのに対して、先生は、「そういうことはベトナムの内政の問題であるから、日本がとやかくいうべき筋合いではない」と答えられた。この質疑応答は十数年を経たいまでも私の記憶のなかで鮮明に残っていると同時に、金大中氏の処刑問題にからんでもしも大平先生が現在総理大臣でおられたらどうおっしゃられるか、全く馬鹿気た妄想ではあるが、地下に行って先生のお考えをうかがいたくなって仕方がない。

――追記――先生は政治生活から退かれたら故郷に帰って悠々自適の読書生活をお考えになっておられた向きもあるように聞いておりましたが、私が期待しておりましたのは、そのおりには母校一橋の教壇に立たれて、身をもって体験された世界政治に関する知識と年来抱かれていた理想との類い稀な哲学的綜合を基として講義していただくことでした。在学生と机を並べて受講する自分を想像して胸の高鳴るのをおぼえるのでしたが、それは私一人ではないと思います。

（日本陸運産業社長）